

## 放送通訳の訳出率 ～同時通訳と時差通訳の訳出率の比較研究～

[台湾輔仁大学提出修士論文要旨]

小栗山 智

台湾輔仁大学翻訳学研究所

(1999年7月)

世界のボーダレス化が進む今日、各国間の人的、物的、文化的交流の頻繁化にともない、異文化間コミュニケーションの担い手として通訳者が活躍している。最近日本では衛星放送を利用して、世界各国のニュースや各種番組が国内向けに発信されているが、ここでは通訳の新しい領域である放送通訳や字幕翻訳が行われている。

現在、ライブなどを除く編集が既に完了しているニュース（編集済みニュース）では、そのほとんどは時差通訳と呼ばれる方式が取られているが、突発的な事件の報道やライブの場合は、生の同時通訳（生同通とも呼ばれる）が行われる場合もある。こうした放送通訳は、放送の慣習に従わなければならないこともあり、会議通訳や随行通訳に比べると、文体、用語、時間、聞きやすい声などの制約がその難度を高め、放送通訳独自の特殊性を形成していると言える。

では、こうしたさまざまな制約がある中で、編集済みニュースに時差通訳ではなく生同通をのせることは可能だろうか。一般的に編集済みニュースに生同通をのせることは通訳者の能力範囲を超えるものと考えられており、原則的には番組の発信側あるいは制作側は、映像ないしオリジナル原稿を通訳者に提供することが必要である。しかし、台湾の傳訊電視（Chinese Network Television/CTN）では、日本向けに同社の一部の中国語ニュース番組に日本語通訳をのせていたが（1996年12月～1999年3月）、この中で実際に編集済みニュースに生同通をのせることが度々あった。これは放送通訳の作業が他のニュース関連部門と切り離され、単独のシステムとして運営されていたため

---

OGURIYAMA Tomo, "A Study of Delivery Ratio in Simultaneous and Prepared News Broadcasting." *Interpretation Studies* (Special Issue), December 2000, pages 106-108.

© 2000 by the Japan Association for Interpretation Studies.

ある。このような編集済みニュースに生同通をのせた場合、通訳の最高使命とも言える情報の伝達は果たして機能するのか、という疑問点が本論の研究動機となっている。

本論では、放送の数時間前から編集済みニュースのニュース原稿を翻訳し、番組放送と同時に通訳者がオリジナルの音声に合わせて訳文を読み上げる時差通訳と、同時通訳者がニュース原稿も訳文もない状況で行う生の同時通訳を、5W1Hによる情報の単位化を通して訳出率を算出し比較を試みた。具体的には台湾の傳訊電視で行われた放送通訳を例に挙げ、同テレビ局が放送する香港発信（一部は台湾から発信）の北京語ニュースにおける編集済みニュースの時差通訳と生同通の訳出率を比較し、その結果から生の同時通訳の機能的意義を考える。

第一章では序論として放送通訳のこれまでの背景と資料説明を述べ、第二章では放送通訳の作業手順をCTNとNHKとで比較するほか、放送通訳と会議通訳の特殊性について触れる。第三章では、生同通を含めた放送通訳の訳出率の算出にふさわしい方法を検討し、5W1Hの概念を用いた情報の単位化を試みる。第四章では、第三章で得られた結果から、実際に生同通と時差通訳の訳出率を算出し、更に両者を比較して生同通の機能的意義について検討する。最後の第五章では時差通訳と生同通の訳出率を比較した結果を述べ、本論のまとめとした。

放送通訳の特殊性というものは、「放送局の体制」に合わせた結果でありながら、番組発信者側における番組の制作・編成とは切り離された存在として発展してきた。しかし、放送通訳がひとつの専門職として確立されつつある中で、ニュースの制作側と放送通訳者の双方が情報を確実に伝えるという同じ使命を持っているということを互いに認識し合い、より効率的な協力関係を築くべきであると考え。本論では編集済みニュースにおける生同通の訳出率の算出を通して放送通訳が機能する可能な範囲を提示した。放送通訳を導入する体制の取り組み方にひとつの参考となれば幸いである。

---

著者連絡先 (E-mail): [wwccww@netvigator.com](mailto:wwccww@netvigator.com)

小栗山氏の修士論文のうち、第1章の全文は以下のウェブサイトにて閲覧することができます。  
(2000年11月11日現在) [Online] <http://ux01.so-net.ne.jp/~a-mizuno/kuriyama.html>

---

#### 【参考文献】

- 今井邦彦 (1992) 「ジッパーは苦手よーレラヴァンス理論」 『月刊言語』 6月号 大修館書店  
木佐敬久 (1997) 『「放送通訳の日本語」受け手調査と話す速度の研究』 新プロ「日本語」  
共同通信社 (1997) 『放送ニュースの手引』 社団法人 共同通信社  
講談社 (1998) 『中日辞典』 (第1刷) 講談社  
永田小絵 (?) 「放送翻訳の選択的伝達に関わる課題」 [Online] <http://member.nifty.ne.jp/NAGATA/97h.html>

- 永田小絵 (?) 「同時通訳訳出の比較－香港返還記念式典のスピーチから」 [Online] <http://member.nifty.ne.jp/NAGATA/hk71.htm>
- 永田小絵 (?) 「通訳の耳－通訳における自然言語情報処理の方法」 [Online] <http://member.nifty.ne.jp/NAGATA/ronbun.html>
- 水野的 (1992) 「放送通訳の理論的課題」 『通訳理論研究』 第2号 (第2巻第1号)
- 水野的 (1993) 「放送通訳の理論的課題Ⅱ」 『通訳理論研究』 第4号 (第3巻第1号)
- 目黒博 (1995) 「放送翻訳の現状」 輔仁大学翻訳学研究所 講演資料 (12月28日)
- 守一雄 (1998) 『認知心理学』 (初版第3刷) 岩波書店
- 藤井章雄 (1996) 『ニュース英語の翻訳プロセス』 早稲田大学出版部
- 船山仲他 (1997) 「同時通訳と認知言語学」 『月刊言語』 8月号 大修館書店
- Sperber, D. & Wilson, D./内田聖二・中達俊明・宋南千・田中圭子訳 (1993) 『関連性理論－伝達と認知』 研究社 (原著 *Relevance: Communication and Cognition*, 1986. Harvard University Press)
- 何月華 (1997) 『探討電視新聞口訳的訊息處理』
- 汝明麗 (1996) 『從使用者觀點探討口訳品質與口訳員之角色』
- 鄭貞銘 (1992) 『新聞採訪的理論與糞稿』 台湾商務印書館
- 鄭貞銘 (1995) 『新聞原理』 五南圖書出版公司
- 馮小龍 (1996) 『廣播新聞原理與制作』 正中書局
- 孫慧雙・訳 (1992) 『口筆譯概論』 北京語言學院出版社 (原著: *Interpreter pour Traduire*, 1978. Washington D.C.: Pen and Booth)
- 王洪鈞 (1996) 『新聞採訪學』 正中書局
- 歐陽醇 (1993) 『採訪寫作』 三民書局
- 楊承淑 (1998) 「口譯「專業考試」的評鑑意義與功能」 第二屆口筆譯教學研檢討會論文
- 周兆祥・陳育沾 (1995) 『口譯的理論與實踐』 台湾商務印書館